北海道勤務８年目 今思うこと…

檜山医師会
乙部町国民健康保険病院　宮　西　秀　二

私は北陸・石川県出身である。

元々は専業農家の跡取り息子のはずであった。

高校を卒業し、北大理類に在籍後、再受験。金沢大学卒業後、第二内科医局員として勤務していたのであるが､将来は北海道勤務を考えるようになった。「一度しかない人生。人生後半は多少好きにやってもよいではないか｡そうだ！　やはり北海道勤務だ」と、始めは軽い気持ちであった

当時は医師が病院から引き揚げる事態が全国で頻発しており、偶然にも平成18年厚岸町国保病院支援(たったの１泊)、続いて江別市立病院支援（７泊）を経験でき、ここで医師不足の現実を目の当たりにしたため、さらに北海道勤務を強く考えるようになった次第である。

特に江別市立病院はとても悲惨であった、いや悲惨すぎた！！　15人もいた内科医が、いったん０になってしまったのである。そのため、日本全国から数人の応援医師が毎週江別におり、院長・事務長は頻繁に宴会、医師勧誘していた。なんてこった、北海道ってホントひどい！　金沢大学がほとんど支配している北陸地方では、とても考えられない状況であった。

なお、この時は久しぶりの北海道、一緒に医学部を再受験した仲間（現在札幌市伏見・啓明地区で整形開業）と約10年ぶりに再会。札幌雪祭りにも感動したのを覚えている。

諸事情あり、３年後夢が叶うこととなった。新潟～（フェリー）～小樽到着。早朝マイカーで北海道初の勤務地・静内に向かったあの感動は忘れられない。静内→別海→斜里などに勤務。そして昨年から、乙部町国保病院勤務、院長になった。いや、みんな退職したため、なってしまった！のである。

ふりかえると今…ふと考えることがある。

「北海道の地域は本当に医師不足か？」である。

正直なところ、私は疑問に感じている。

北海道に勤務して分かったことがある｡それは｢医師不足」と言っている多くの自治体でも「チャンスはなかっただろうか？」ということである。少なくとも私が北海道内で勤務した病院、あるいはその近隣の病院では「チャンスはあった」と感じている。

これまでの勤務地では、どの医師もそうであったが、大歓迎される。しかし、そのうち自治体や職員と多少衝突が生じてしまうことがある。一番の問題はそれからだ。話し合いというものがほとんどなかったように思う。このやり方に不満があるなら…と態度が急変。最終的には、医師が退職することになるのだ。その時、医師は「この自治体や病院から放り出された」と感じるようだ。

しかし、自治体や病院は「自分たちが放り出したなどとは全然思ってもいない」ようだ。

ここに、大きな感覚の違いがあるように感じてならない。私はこのことを大変残念に感じているのである。話し合いで問題解決。医師退職防止につなげられたこともあったのではないか、と思われる。

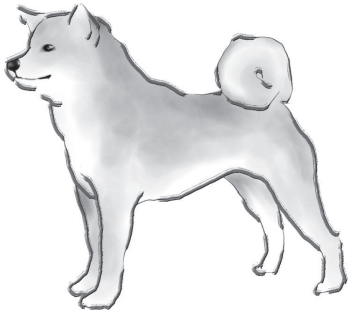
こう言うと大反発をくらいそうだが…ご理解いただきたいのは、ひょっとしたら自分たちもいわゆる「チャンス」を逃したかもしれない…と感じてほしいのである。

今、院長として感じることが一つある。「一つ改めると、一つ問題が起きる」ということである。そこで、その問題を話し合いで解決する。「次にもう一つ改めるとまた一つ問題が起きる」。また話し合いで解決する。

「人間生涯苦悩の連続である」というが、この年齢になり、全くそのとおりだ、とかみしめているところである。このようなことを考えるようになったのは､もしかしたら自分が進歩したのかもしれない、いやただ年を取ったのかもしれない。そう感じている。

普段診療に従事していると、患者さんは自分の地域にせっかく来た医師にいてほしいと思っているようだ。そう感じるのは私だけではなく、地域医療に従事する医師の皆さまも同じだろう。

しかし、それとはまったく違うところで、このような事情で医師が去ることは、まことにもったいないと私は思っているのである。

一つの地域でもいい。北海道の地域医療に従事する医師の退職が減り、安定した地域医療が継続されることを切に願ってやまない今日この頃である。

ついに本年還暦です！